



教職大学院 Newsletter

No. 4

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

2008.06.06

開設から2 か月を振り返って

——教職大学院のユニークさ——

教育学研究科長 梅澤 章男

教職開発専攻は 2001 年度から学校教育専攻に開設した夜間主学校改革実践研究コースの教育実績を基礎としているが、専任教員と学生定員を大幅に増加させた独立専攻の大学院である。この専攻を設置するために、新たな専任教員を採用する人事計画や既設大学院と学部の改組案などを作成する必要があったため、その準備に随分と多くの時間を費やした。そうして、ようやく教職開発専攻がスタートし、2 か月が経過した。研究科長として既設大学院の経験と比較して、教職大学院のユニークさを実感している。

既設大学院では、ほとんどの教員が授業で毎週会う院生を通して教育の手ごたえを感じていた。一方、教職開発専攻は、15 名の専任教員がグループで拠点校や連携校に出掛け、そこでの授業づくりや組織づくりに協働して参画するという点に特徴がある。教室が大学の外にあるため、専任教員以外の学部教員は、拠点校や連携校の学校現場にどのような感想なり、要望があるのかを直接知る機会は少ない。教職大学院の専任教員が体験した手ごたえを聞く機会もさほど多くない。何より専任教員のスケジュールは学校に出掛ける予定がびっしりと書き込まれていて、学部教員に手ごたえを語る時間が取れないのが実情と思う。研究科長として、拠点校に出掛けた勤務実績に決済の判を押すとき、その回数と時間に驚くことになる。教職大学院を担当する教員が体験している現場の感触を共有できないもどかしさ

を感じつつ、それを汲み取って、既設大学院の専任教員にうまく伝えることの重要性を認識した2 か月であった。

ご承知のように、教職大学院は我が国の教師教育と教員養成改革のために設けられた新しい仕組みである。実務教育を重視して設計された法科大学院と同様に、学生定員の充足率、修了生の教採合格率や管理職登用など数値化できる諸項目が評価され、公表されることは容易に予測できる。修了生や拠点校の大学院に対する質的評価も重視されるだろう。そこで、修了生や拠点校の総括的評価が、万が一悪いものであるなら、「協働」をキーワードとする以上、協働がうまく働いていない証拠になってしまう。問題があったとしても、即座に解決する手立てを講ずる必要がある。新しい試みであるから、当然予想できない困難さや問題点が浮上するだろうと予想している。教職大学院の現状をどのように汲みあげ、学部で共有化し、改善策とサポートを遅滞なく繰り出せるかが重要だと認識している。忌憚のない御意見、御要望をお寄せいただけると幸いである。

内 容

- 幕開け(1)
- 運営協議会開催される (2)
- 連携校だより ～熊川小学校(4)
- Staff 紹介(6)
- 院生の自己紹介(9)
- ラウンドテーブル予告(13)
- 教育実践と教育改革を考えるために(14)
- 教職大学院報道ファイル(16)

第1回運営協議会開催される

平成20年5月15日(木)に平成20年度第1回運営協議会が開催されました。梅澤研究科長、中川副学長のあいさつに続き、福井県教育庁の加藤良子企画幹からもごあいさつをいただきました。

福井大学教職大学院スタートに寄せて

福井県教育庁企画幹 加藤良子

福井大学教職大学院の平成20年度第1回運営協議会の開催に当たり、一言、ごあいさつを申し上げます。

この4月から、福井大学教職大学院が開講し、福井県教育委員会から推薦した15人を含む34人が第1期生としてスタートを切っています。

教職大学院制度の創設については、学校を巡る環境が厳しさを増し、教員の質の向上が求められる中、中央教育審議会の答申(平成18年7月)の中で、教員の資質・能力向上策の一つとして、その考え方が示されました。

現在、教職大学院は、学校現場の「核」となるリーダーの育成を目的として、全国19の大学で設置されています。しかし、報道等によりますと、そのうちの7校においては、定員に満たない状況が生じているとのことであり、全国的に見れば、学生の確保や処遇など課題も少なくないようです。このような中で、本県の福井大学教職大学院においては、大学院生である現職教員の勤務校に専任教員が向う「出前方式」や、単位取得の負担軽減策として工夫が講じられるなど、特色ある教育方法が打ち出されており、学生や現職教員から選ばれる大学院となっています。

早いもので、開講以来、1か月余りが経過しましたが、各拠点校等においては、授業の進め方やカリキュラム編成についての事例研究が熱心に進められていると聞いています。このように校内研修と一体化して行われる実践重視の取組は、学校の研究体制の活性化、学校教育全体の活性化につながっていくものと思われまます。そして、そのことが、ひいては今後の県全体の教育の活性化、教員の質の向上へとつながっていくものと思われまます。

福井大学教職大学院は、本県の教育を活性化する上で大変重要な役割を果たしており、本県の教育の質を必ずや高

めていただけるものと大きな期待を寄せています。ぜひとも、この教育システムが有効に

機能するように、そして、全国でトップクラスの教職大学院となっていくように、関係機関が力を合わせて育てていく必要があると思っています。

ところで、県では、教育や文化に関する諸課題についての改善策や新たな振興方策について検討するため、県内外の有識者で構成する「教育・文化ふくい創造会議」を昨年の8月に設置しました。第一次の協議事項には、論点の一つとして「教員の資質向上策」を取り上げましたが、11月にいただいた第一次提言の中には、「大学等との連携で磨く資質・能力」が示されたところです。

県では、いただいた提言について、できるものから速やかに施策に反映すべく、現在、組織を挙げて取り組んでおります。

質の高い教員を育てるには、福井大学教職大学院と福井県教育委員会との連携が何より大切です。今後とも、いろいろな面で互いに連携・協力をしながら、本県教育の質の向上を図っていきたくと考えています。

福井大学教職大学院におかれましては、魅力ある教職大学院として、本県の教育力向上のため御尽力を賜りたいと思います。そして、質・量ともに優れた教師教育のモデルとして、広く全国に発信していただくことを願っております。

終わりに、本日のこの協議会が実り多いものになりますことを御祈念申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



全体会では、NHKで報道された教職大学院の紹介番組を全員で視聴した後に、①福井大学教職大学院の運営体制等（案）について、②平成20年度年間事業計画（案）について、③平成21年度学生募集スケジュール（案）について協議があり、すべて原案どおり承認されました。

この後、拠点校・連携校・県教育委員会、市町教育委員会の4つのグループに分かれて分科会が持たれ、大学側からの教職大学院の現状報告、各機関からの要望、意見交換等が行われ、実効性のある連携が一段と進みました。



福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

運営協議会要項

平成20年3月7日 研究科委員会決定

（趣旨）

第1 この要項は、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会（以下「運営協議会」という。）について、必要な事項を定める。

（審議事項）

第2 運営協議会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 教職開発専攻の運営に関する事項
- (2) 教職開発専攻の事業計画に関する事項
- (3) その他必要な事項

（組織）

第3 運営協議会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教育学研究科長
- (2) 教育担当の副学部長
- (3) 附属学校園担当の副学部長
- (4) 教職開発専攻長
- (5) 教職開発専攻の専任教員（客員教員を含む。）
- (6) 福井県教育委員会関係者 若干名
- (7) 福井県教育研究所長
- (8) 福井県教育庁嶺南教育事務所長
- (9) 福井県特別支援教育センター所長
- (10) 関係市町教育委員会教育長
- (11) 拠点校校園長

（委員長）

第4 運営協議会に委員長を置き、教育学研究科長をもって充てる。

2 委員長に事故のあるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

（会議）

第5 委員長は、運営協議会を招集し、その議長となる。

2 運営協議会は、委員の3分の2以上の出席がなければ会議を開くことができない。

（委員以外の出席）

第6 委員長は、必要と認めるときは、運営協議会に委員以外の者の出席を求めることができる。

（庶務）

第7 協議会の庶務は、総務部教育地域科学部支援室において処理する。

附 則

この要項は、平成20年4月1日から施行する。

連携校だより①

若狭町立熊川小学校 教諭 松宮 弘明

毎日、授業改革に取り組み、また学校のリーダーとしても活躍しながら大学院生活を送っているリーダーコースの院生。新学期が始まり、早速、校内を巻き込んだ研究授業や研究会など、それぞれの学校のリズムや特徴に合わせて、長期実践研究としての試みを始動しています。その実践研究の様子を紹介していくコーナーを新設しました。

第1回は、若狭町熊川小学校の松宮先生からの学校便りです。

本校ではこれまで4年間にわたり国語科を中心に研究を展開してきた。ご存知のとおり(?)本校は極小規模校で複式学級保育校であり、児童も職員数も少ない中での研究推進である。一昨年度までは、どちらかという授業そのものよりも、それを取り巻く点(学習習慣作り、基礎学力向上のためのドリル等)に重点が行きがちだった。しかし、昨年度から、授業についてもっと研究を深め、児童の学びが中心となる授業改善をしていく必要があるという方向性が明確になった。そして、本年4月には、研究主任から、「読む力を付けること」の授業改善に向けての提案があり、教師主導型の授業からの脱却を目指し、子ども中心型の授業への転換・改善を共通理解したところである。



このような中、昨年度の授業研を振り返ってみると、授業者の反省に始まり、質問→意見交換といった定番の流れでの事後研究会になり、授業者への視線は高まるがそれが参観者の授業改善につながらないというもどかしさがあった。そこで、今回、不肖ながら、これまでの教職大学院で学んだ至民中学校や附属小中学校のスタイル、さらに、ラウンドテーブルやカンファレンスで刺激をいただいた様々な方々の実践をもとに、校長・研究主任と連携を取りながら本校職員へ次のようなメッセージを発信した。

➤ 子どもの学びを中心に据えた授業作りを意識するところからスタート

授業改善を進めるためには、まず教師一人一人が、授業において子どもの学びや変容を見て取ることが大切である。学びのプロセスを明らかにすることは、ひいては教師の指導の在り方を問うことになるものとする。

➤ 子どもの学びを見取り授業力を高めるための研究方法について＝特に事後研究の見直し(グループによる話し合いを通して)

従来行ってきた事後研究会のスタイルを刷新してはどうか。参観者が、学びの主体である児童の姿を通して考えたことや、授業に対する考え方、教師の発問や授業の構成等子どもの学びを高めるための研究会にしていきたい。



5月12日(月)
6年国語
「カレーライス」
事後研究会

そして、5月12日に行われた実際の授業公開、事後研究会。とまどいながらの研究会がスタートした。何をどう話せばよいか分からない、折角、大学の先生が入ってくださるのだから的確なアドバイス（指導）がほしいなどの声もあったが、設定した1時間のグループセッションはあっという間に過ぎ、もっと話したいという声が開かれた。また、その後の全体セッションでは、グループ別の話し合いの報告があり、話し合いの内容が子どもの姿を追ってなされていたことが十分伺えた。しばらくたったある日の職員室で、「これじゃ子どもの学びが中心の授業になってないな。」「今日は子どもの発言が繋がって見てほしかった。」などの声も聞かれるようになってきた。

「とにかく突き進んでください」の訓示を受けてスタートした4・5月。何かを始めたいが…と手探りの状態であったが、ようやくスタートが切れたという実感である。振り返ってみると、職員の協働の力だと再認識させられた。特に、校長のバックアップがなければこのような展開は不可能であった。校長が自分の描くビジョンを明確に知らせ、本校の進むべき道筋と教職大学院との学びを融合させながら、広い度量で進めてくださったおかげだと痛感した。

まだ、始まったばかりの本校の授業改善であるが、今後も、校長、研究主任、そして、全職員の協働を最大限に生かして研究実践に取り組んでいきたい。



熊川小学校長 宮崎 洋美

先日、大学の淵本先生と岸野先生を交えて全職員が松宮教諭の公開授業をもとに本校の目指す授業の在り方について討議する校内研究会を実施しました。

本校では、スクールリーダーとしての松宮教諭と研究主任との協働による研究体制が昨年度から続いており、目指す授業理論はほぼ全職員で意思統一できたところです。そこで、今年度は更なるステップとして全職員の主体的な授業公開と研究討議を期待しています。小規模校の本校では、教育活動のすべてに職員の一体感が重要であり、研究体制においても松宮教諭のリーダー研修が職員の士気を高め、両々相俟って活性化し向上することが肝要だととらえています。そのために校長としては、常に側面からの姿勢で「職員室に3つのわ(話・和・輪)あり」の舵取りに徹するのみと心しています。

Staff 紹介④

教職大学院には様々な分野で実践と研究を重ねてきているメンバーが集まっています。そして教職大学院の専任教員ばかりでなく、多様な視点と位置からこの教職大学院を支えています。そうしたスタッフそれぞれの固有の実践と研究の歩み、教職大学院に寄せる期待、これからの展望について語ってもらうコーナー。第4回です。



このたび、教職大学院のスタッフとしてお世話になることになりました。不安な気持ちでいっぱいですが、『分相応』という言葉の様に、自分のできることを見つけて自分らしくやっていきたいと思っております。

私は、新採用からの2年間、小学校勤務でした。海沿いの1学年1クラスの小さな学校であり、毎年新採用の先生が1人ずつ入ってくるということが続いたので、担任の先生がたいへん若く、和気あいあいとした活気ある雰囲気のある学校でした。また、同じ地区の中にもたくさんの新採用の先生方や経験わずか数年という若い先生方がたくさんおられたこともあり、週に1回そのメンバーが集まってバレーボールやバドミントンなどを楽しんでいました。勤務校では、子どもたちとよく一緒に活動しました。休日にメダカを見つけに車で出掛けたり、夜空の観察会を開いたりして、授業以外でもたくさんのかかわりを持っていました。その後はずっと中学校で勤務しているので、この2年間は貴重な経験になっています。

中学校に勤務するようになって一番力を入れたことは、やはり部活動でした。自分が教員になっても現役で競技していたということもあり、かなり熱い指導をしてきました。部活動はもちろんですが、担任や教科指導についても、管理職や同僚の先生方、社会科の先生方には、教師として、人としてのあるべき姿のようなものを学ばせていただきました。今でも、そういう方との親交は続いていますし、それが私の“財産”になっています。

附属中に来て、早7年目を迎えました。附属中に勤務し

向当 誠隆 こうとう せいりゅう

なければ知らなかったこと、できなかったことは数多くあります。私が附属中に赴任してまもなく、大学生時代から私を知っておられるM先生にお会いしました。開口一番、「まさか附属にくるとは思わなかったよ。」という言葉は、私がいかに大学生時代から、教科や研究に縁遠いところにいたかを物語っています。特に、研究という点については、附属中に勤務するまで避けていたような気がします。しかし、附属中で研究企画に入らせていただいて、附属中の研究のすばらしい面をいろいろ学び、また県外の学校の実践を多く知る中で、実践し省察していくことが研究であり、研究が日々の教師としての仕事に直結しているということを教えていただきました。学校全体では研究の具体的な進め方において、個人的には大学院の論文において、大学の先生方の御助言や御指導もいただきました。個人の教科の実践においてはもちろん、研究主任として仕事をする際に、これらの経験がどれほど心強かったか言葉では言い尽くせません。

附属中でのこうした仕事を経験していると、ふとそれまでにいただいた多くの諸先輩方からの教をよき思い出すことがあります。『温故知新』…新しい教育に目を向けてみると、昔から普遍の考え方があることに改めて気付くことがあります。『大同小異』…小さな違いはあっても根本は同じであり、小さなことにこだわりすぎて大切な本質を見失わないということを改めて感じています。これまでの多くの人からいただいた御指導はととてもすばらしいものであったということ再認識することができ、御指導いただいたことそのことにも感謝しています。

教職大学院は、私にとってこれまでとは大きく異なる環境であり、未知なるところでもあります。だからこそ、またこれからの自分にとってプラスになることを学ぶことができると思っています。まず自分のためという小さなことから始め、学校のため、大学院のため、そして福井の教育のためというようにつなげていけたらと思います。附属中での経験も生かして、少しでも力になればと思いますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

長谷川 義治 はせがわ よしはる

平成 19 年 4 月 1 日付けで福井大学に着任しました、長谷川義治です。教職大学院の開設に当たり、実務家教員として県教育委員会から派遣された 3 人の中の一人です。私は、これまでは、高等学校の数学担当を 15 年、教育研究所や県教育庁で教育行政を 15 年、校長を 4 年の計 34 年間、公立学校教員として勤務してきました。

高等学校の勤務歴は、丹生高等学校（6 年間）と高志高等学校（9 年間）の 2 校です。丹生高等学校の最初の 1 年間は、織田町にあった織田分校（夜間定時制、昭和 61 年 3 月閉校）に勤務し、2 年目からは、本校勤務になりました。特に、最後の 3 年間は、進学クラスを担当し、共通 1 次試験 1 期生として、福井大学教育学部に 7 名が合格するという幸運に恵まれました。私は、生徒の学力を、高等学校入学時の成績で測ってはいけないということを学びました。

高志高等学校に転勤したのはちょうど 30 歳で、そこでの 9 年を振り返ると、何事にもがむしゃらに取り組み、充実した 30 歳代であったと思うと同時に、それをさせてもえる同僚に恵まれたことに感謝しています。転勤して 2 年目には、藤島・高志学校群選抜制度が導入されました。学校群 1 期生は何事にも意欲・関心が高く、文系クラスの生徒の一部が、「自分たちも数学Ⅲの微分積分を学びたい」と言ってきて、放課後、特別ゼミを設けて指導したほどでした。生徒自身に学びたいという意欲を育てることが重要と気付きました。

教育行政としての勤務歴は、教育研究所が通算 4 年、県教育庁が通算 11 年の計 15 年間で、そのうち、教育研究所の副所長 1 年、県教育庁の課長 2 年の計 3 年間は管理職です。教育研究所での最初の 3 年間は、数学教育講座や学力調査を担当しました。特に、福井県学力調査は、昭和 20 年代から、毎年、小中学校で実施しているもので、その問題作成と結果分析、指導法の改善提言までを行っているものです。当時は、まだ、「観点別評価」は一般的に認識されていない状況で、小中学校の教員にも問題作成に加わってもらいましたが、集団準拠テストには慣れていても、目標準拠テストは未経験に近い状態で、「数学的な考え方」とは何か、「表現・処理」と「数学的な考え方」の 2 観点が混じっていないかなど、問題作成にとっても苦勞したことを覚えています。私自身にとって、「数学的な考え方」に

ついて初めて深く学ぶ機会になりました。

県教育庁では、指導主事から課長まで

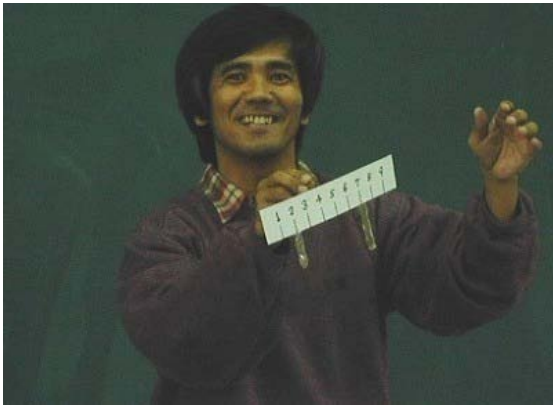
を経験し、学校訪問等での指導助言のほかに、教育予算のことや議会对応、メディア対応など、いわば学校教育を支える部分についても携わりました。さらに、学校教育にかかわる法律や規則などを学ぶ機会も多くありました。特に、指導主事として心掛けたことは、「指導主事は教員の応援団」ということです。これは、ある研究大会での失敗から学んだことで、生徒を日々指導している教員に意欲を持ってもらうために、指導助言したり、情報提供したりすることが重要な役割であると思って実践してきました。

校長としての勤務歴は、県立清水養護学校（2 年）と県立藤島高等学校（2 年）の計 4 年間。管理職には、学校の現状を的確に把握し、課題を明らかにして、具体的な対応策・方針を所属職員に示すことが求められます。そのためには、日ごろから所属職員とのコミュニケーションが重要であると考え、そのための時間を取るよう心掛けました。

学校において、卒業証書授与式（卒業式）は、年間学校行事の中でも格別の意味があります。その学校の教育活動の成果を結晶の形で示す場であると思っています。卒業式の校長式辞を作成に当たって、私が心掛けたことは、当日の主役は生徒であることと、その生徒を育てたのは、教員だけではなく、事務職員、校務員、在校生、保護者、地域の方々及び教育委員会のすべてであることの 2 点です。4 回の卒業式とも、自ら作成した式辞を起草し、教頭、事務長、教務主任、学年主任、もちろん、事前に、国語科教員等にも回覧し、赤ペンを入れてもらって完成させました。

今年 4 月から、教職大学院が始動しました。教職専門性開発コースの院生が、週 3 日間、拠点校でインターンシップをしたり、彼らが、スクールリーダー養成コースの院生と合同カンファレンスしたりしているのを見て、教員養成や教員の力量向上の点で、大きな可能性を感じています。公立学校とは違った立場ではありますが、日本一の教職大学院を目指して、精一杯取り組んでいきたいと思っています。





IEA や PISA などの国際調査によって、我が国の数学の成績はトップレベルにあるにもかかわらず、「数学が好き」「数学は生活で役に立つ」などの数学に対する態度は、その成績と不釣り合いなほど否定的であることが明らかにされています。近年、数学的活動の充実や数学的リテラシーの形成が課題となっているのもそうした背景からです。

さて、高校生ともなると、算数・数学の長い学習体験によって、数学に対する様々な〈信念〉—それは、必ずしも意識されてはいるとは限らず自己観や能力観、学習観、教科観などの様々な感情や世界観の集合体であり、比較的長い期間をかけて形成され、学習者自身が学校の授業や他の経験を通して暗黙のうちに学び取っているもの—を持っています。それは、確実に学習者の数学的問題解決行動に大きな影響を及ぼしています。例えば、「数学を学んだところでいつ使うのだろう」「日常とかけ離れている」という教科観や「問題を解くことが数学だ」「数学は、計算いっぱいの手間がかかるもの」「算数・数学の授業は、どれも公式や定理の詰め込み方式」という学習観や授業観、「私みたいに数学に苦手意識を持っている人」という自己観などの否定的な〈信念〉は、「楽しくもなかったし、身にも付かなかった」という記述に代表されるように、数学に対する態度や知識の獲得にも否定的な影響を及ぼしていることが分かります。

こうした長期にわたって形成されてきた数学に対する態度—とりわけ、否定的な〈信念〉—を肯定的なものにどう組み替えどう再形成していくかは高校数学の大きな課題です。30年近くも沖縄の高校現場にいて、こうした課題と向き合い、数学の成績とその態度とのミスマッチを断ち切る具体的な一方途として、数学の世界と現実世界とを往還させる教材を準備し、学ぶことの意味が顕在化されるような文脈に乗せた授業を少しずつ創り上げてきました。数学教育における「楽し

伊禮 三之 いれい みつゆき

い授業の創造」の系譜に属する実践研究だと考えています。

生徒たちは、こうした授業をどのように受け止めているのでしょうか。この授業の典型的な感想を紹介します。

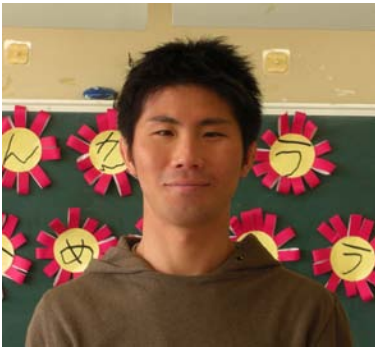
「(これまでの数学は) それでも、やっぱり楽しいと心から思えるものではなかった。「楽しい」と思うようになったのは本当に「楽しい数学」の授業からだ。先生の授業では数学をやっているという気がしないくらい、「私の中の数学」とはかけ離れていた。「私の中の数学」とは、今まで長く書いてきた文章を読んだら分かるように、「生活とはかけ離れた」「難しい」「苦しい」「楽しくない」そんな教科をよくもここまで変えてくれた!!!って感じだった。授業に行くのがいつも楽しみで、授業の時は子供のころに戻って、いろいろ作って熱中し、授業の帰りは遊園地の帰りのようなドキドキが覚めやらない気分のまま、自分の作ったものを教室に持って行って、みんなに教えて、家に持ち帰って、家でも教えて…。先生の数学はいつも遠くにある感じがしなかった。授業のネタもいつも身近なものばかりで、「ああ—こうなってたんだ—」と感心させられっぱなし。楽しい数学で学んだことは、「数学」ってそう遠いものではなくて近いものなんだということ。そして見方を変えれば楽しいものなんだな—と思った。そう思えるようになったのも先生の「楽しい数学」の授業があったからだと思います。」

長々と数学教育に関することを述べてきましたが、こうした数学教育における「楽しい授業」の創造や現在の僕の実践的なスタイルの基盤には、教師生活のスタートから、「教育実践の自己展開サイクルの確立」(浅野誠)を指向した持続的な営み—教科と教科外教育の二つの小さなサークルに属して、月に1度、自分の実践を報告し、他者の視点も交えながら実践の事実を省察し、優れた実践にも学びながら、さらに自分の実践を再構成していく—があったからだと考えています。

現在、学部の授業づくりに格闘している毎日で、スタッフの足手まといになっている観がありますが、こうした地味な1時間1時間の具体的な授業づくりのささやかな経験が、少しでも教職大学院の力になればと考えています。

21 世紀の教育を担う 院生紹介③

若い世代の院生



加納 佳晃

かのう よしあき

(福井県立嶺北養護学校)

学校で教師として働き始め、早くも4年が経ちました。大学附属中学校で社会科学の講師として2年間、武生東高等学校、福井南養護学校、そして現在の嶺北養護学校には今年度で3年目になります。それぞれ、素晴らしいご縁をいただき、多くの先生方、多くの子どもたちに出会い、育てられてきたと思います。

早くも4年と言いましたが、あつという間だったという思いと、4年前がはるかに遠い昔のように感じる思いがあります。4年前の自分は、日々どんなことを考え、子どもと向き合ってきたのだろうと、ふと思いました。

附属中学校で初めて教壇に立ち、いい授業がしたい、子どもが考える社会の授業がしたいと、がむしゃらに張り切っていました。しかし、自分の思っていたとおりにいかないことがほとんどで、授業に行くのが苦しく思うこともありました。子どもに認められたくて子どもの信頼を得たくて必死でしたが、それが空回りしては落ち込んでいました。

同僚の社会科の先生と同じような授業をしてみようと思いました。同じように問い、同じように展開していく。しかし、子どもは、その先生のとけのように生き生きとはな

かなかしてくれません。その先生と自分とはどこが違うのだろう。私は、自分の思いだけで精一杯で、子どもと向き合えていなかったことに気付かされました。それでも失敗続きでしたが、自分がやりたいと思っていることが少しずつ変化していきました。

特別支援学校に勤務することになり、やはり子どもがまた自分を変えてくれました。こうしたい、こうなってほしい、という私の意図は、子どもにいともあっさり無視されました。子どもが考えていること、求めていることに真剣に向き合わなければ、子どもは素直なまでに、こたえてくれませんでした。子どもに認められたいなどと考えている暇もなく、子どもは思うままに動いていき、後ろについていくのがやつとでした。子どもと向き合うとはどういうことなのか、改めて考えさせられました。

4年間で自分が変わってこられたことが大きな励みに感じるがあります。学校に、同僚の先生方に、そして子どもに、本当に育てられてきました。そして今また、教職大学院に育てられ、自分が変わろうとしています。育ててもらった恩を、目の前の子どもたちに少しでも返していけたらなと思いますが、まだまだ多くの人の助けが必要なようです。どうぞよろしくお願ひします。

スクールリーダーコース院生

大橋 巖

おおはし いわお

(福井市至民中学校)

早いもので、今年で教職 26 年目を迎えました。現在、教職大学院の拠点校である福井市至民中学校に教務主任として勤務しています。よもやこの歳で、長女と同時期に大学生活を送るとは夢にも思っていませんでした。

さて、私の教員としての座右の銘は、『教育とは、炎を燃え上がらせることであり、入れ物を満たすことではな

い』という、哲学者ソクラテスの言葉です。「知識を



注入するだけの講義型の授業から何とか抜け出したい、そんな思いで試行錯誤しながら授業実践を積み重ねてきました。幸いなことに、一昨年赴任した至民中では、異学年型教科センター方式の新たな中学校づくりに向けた研究が本格的に開始されていました。その中心は授業改革であり、授業を変えることで学校を変えようとする挑戦でした。まず最初に手掛けたのは、授業の枠組みを変えることでした。講義中心の知識注入型の授業から『至民中版問題解決型学習』への転換を図るために「70分授業」を導入しました。私たちは、授業という枠組み自体を変えなければ、中学校の授業は変わらないと考えたわけです。私自身も、50分という時間枠の中で、探究的で協働的な学びを組織することに限界を感じていました。70分という時間枠の中で、いかに協働的な学びを創造するのか、私たち教師集団の研究はその一点に注がれていきました。

当初は、「生徒の集中力が持たないのではないか」「至民中の授業は、70分ありきではないのか」など、多くの批判

を浴びました。しかし、私たちは、「授業が確実に変わってきている」という手ごたえを感じていましたから、余り気にはなりません。むしろ、どうすれば他校の先生方や保護者の方々に70分授業の良さを理解してもらえるのか、そのことに腐心してきました。「参観しているだけでは、長いと感じるだけだ。一緒に授業に参加してもらおう」という発想から、『親子で学ぶ70分授業』という参加型の授業にも挑戦してきました。また、子どもの学びの筋に即して語り合うという授業研究会の在り方そのものの改革も提案してきました。本年4月に、待望の新校舎が完成し、いよいよ本格的に異学年型教科センター方式の学校がスタートしました。これまで取り組んできた私たちの研究の真価が問われる年だと考えています。新校舎は、私たちが目指す協働的な学びを可能にする空間が準備されています。授業の時間枠を変えてきた私たちの研究は、学びの空間を生かすという新たな段階に入りました。

塚本 康一 つかもと こういち

(福井県教育研究所)

『教員研修機関としての研修の充実』をテーマに

福井県教育研究所に勤務して3年目。教職研修課で全体研究や研修講座等の業務に携わっています。本年度、当教育研究所では、教職員の資質・能力の向上を目指して『教員研修機関としての研修の充実』をテーマに掲げ、所長・副所長のリーダーシップのもと、研究プロジェクトや研究推進委員会、全体研究会等の組織を立ち上げました。所員の研修コーディネート力を向上するための研究会を実施したり、研修講座の効果測定を実施し客観性を高める評価方法を工夫したりするなど、研修機能の強化を図る取組を行っています。

◇コミュニケーションで協働、同僚性の構築を

先日、所内全体研究会で『研修の企画・運営』について福井大学教職大学院の先生から講義をいただいた後、ポスターセッションの手法を活用し、『効果的な研修方法の工夫』について話し合いました。「○○○すると研修講座が活性化する」、「○○○の研修方法を取り入れると有意義な研修講座になるのでは…」などグループディスカッションも行い、発表会も大変盛り上がりました。福井大学教職大学院との連携や各課の壁を越えた全体研究により、教育

研究所に所員や大学との協働、同僚性が構築され始めていると手ごたえを感じています。



◇組織の活性化はキーパーソンとシステムづくりから

私は社会科の教材づくりのため、現地取材によく出掛けます。昨年の秋、小学校社会科教科書にも掲載されている京都の「鴨川を美しくする会」を訪れ、世話役の方のお話を聞く機会がありました。この会は、京都市の条例改正を実現したほどの熱心な市民団体です。組織のシステムを確立し、美しくする会のキーパーソンを育てていく世話役の方のエネルギーな行動力に大変感心させられました。スクールリーダーが職場で組織を活性化させ、活動を広げていくヒントがそこにあるように思います。

◇自己マネジメントは市民マラソンで

運動不足・ストレス解消のため、福井マラソンや菊花、つつじ、花はす、大野名水など県内の各市民マラソン大会

に出場しています。主に 10km コースにエントリーし、各地の風景や四季の変化を楽しみながら、ゆっくりと長く走っています。研修講座に受講される先生方を元気よく笑顔

で迎えられるよう自己マネジメントに気を付け、前向きに頑張っていこうと考えています。

山田 修治

やまだ しゅうじ
(福井県立福井東養護学校)

県立福井東養護学校の山田修治です。5年目を迎えた今年度は、高等部1年の担任をしています。いろいろな悩みを抱えながらも、毎日通学に1時間以上かけて、欠かさず学校に登校してくれる生徒達たちの姿を見ると、「今日も学校に来て良かった」「明日もまた学校に行きたい」と思ってくれるようなクラス作り、そして授業が展開できたらと、日々同僚たちとネタ作り励んでいます。

これまでの24年間の教職生活を振り返り、自己紹介とさせていただきます。最初の赴任校は福井市内のマンモス中学校で、とにかく部活動(野球)と生徒指導に明け暮れた6年間でした。その中でも、前任から引き継いだ最強チームで望んだ夏の県大会で、淵本幸嗣先生(まさか大学院のスタッフとしてお世話になるとは…)率いる成和中学校に決勝で敗れてしまった時は、生徒に本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。勝つことの難しさ、生徒の心をつかむことの難しさを痛感した6年間でした。

「自分の知らない教育にかかわってみたい」という理由から、次に希望した赴任先はろう学校でした。それまで試合で一度も勝ったことのない野球部を率いて、北陸地区聾学校野球大会で連続優勝し、そして3度目の挑戦でようやく福井県軟式野球大会に優勝(決勝戦の相手投手が中学時代の教え子というのも巡り合わせを感じました)をつかむことができたことは、自分の気持ちの中で一区切りをつける出来事でした。特に、普通学校の生徒たちに真剣勝負で

勝てたことが、生徒たちの大きな自信につながり、その後、社会人になっても立派に頑張っている彼らは、今でも私の誇りです。

その後、聾教育の原点である早期教育にかかわりたいという思いから、どう見ても似つかない幼稚部に4年間籍を置きました。毎日保護者が後ろに座って、授業中にメモを取る姿には正直つらいものがありましたが、保護者も含めた子どもたちとのかかわりで、専門性の重要性や障害を取り巻く環境について多くのことを学び考えさせられました。

現在の学校では、進路指導部として5年間、生徒たちの卒業指導にかかわっています。教師はどんなに望もうと直接的には高等部3年までしか支援することはできません。その後、一人一人を待っている長い人生をいかに豊かなものにするか、自立して生きていくためには、在学中に何が必要なのか、時間が限られているだけに教師の責任は重大です。「生徒一人一人の自立する力を身につけるには」が、今の私の教職大学院でのテーマです。



吉村 信彦

よしむら のぶひこ
(越前市武生第二中学校)

武生第二中学校の吉村信彦です。昨年度は永年勤続20年の表彰を受け、教員生活が20年過ぎたんだなあ実感させられました。昨年暮れに教職大学院の話聞いたときには、自分に関係のないことだと思っていたのですが、不思議なこともあるもので縁あって学ぶ機会を得ることができました。縁があるといいましたが、今年度、息子もこの福井大学にお世話になることになり、息子と同級生に

なるという幸運を得ることができました。

私が勤務する武生第二中学校は、全校生徒512名21クラスの中規模の学校です。若い先生も多く活気のある学校で充実した毎日を送っています。今年度は昨年度からの持



ち上がりで2年生の担任をしています。学年の年齢構成が比較的高く、私自身がちょうど中間の年齢に位置するため、ベテランの先生方と若手の先生方のコミュニケーションを大切にしています。本校はキャリア教育の一環として「プロに出会う日」や「命のぬくもり赤ちゃん抱っこ」などの体験学習を重視した活動を実践しています。しかし、最大の活動は何と言っても10年間続いている古代米の一種である黒米の栽培です。この栽培実習は3月から10月まで長期間にわたる体験学習です。黒米は、バランスのとれた栄養成分が含まれていることから、滋養強壯の作用があり、虚弱体質の改善に効果があるとされ、胃腸を丈夫にし、さらに造血効果もあるので、頭の働きも良くなると言われています。

今年度はそんな黒米の栽培担当として、生徒たちに田植

えや稲刈りなどの自然体験や、生育状況の観察を通して農業の楽しさ、大変さ、働くことの意義を考えさせていきたいと思っています。また、同時に何気なく食べている食への関心を深め、生産者への感謝の念を深めていきたいと考えています。

私自身、新採用から現在まで越前市で教員を続けており、他の地域の先生方と知り合う機会が余りありませんでした。今回、教職大学院で学ぶことになり、大学院の先生方や様々な校種の先生方と知り合うことができました。この出会いに感謝し、自分自身を高めるとともに、出会えた先生方とのコミュニケーションを大切に、学んだことを周りの先生方に広めていきたいと考えています。この一年が充実した実りある一年になるように様々なことにチャレンジしていきたいと考えています。よろしくお願いします。

荒川 誠

あらかわ まこと

(あわら市金津中学校)

教員になって22年目の今年度、一大決心をして大学院にて学ぶことにしました。この決意には、30歳当時に学年主任だった岩井三弥子先生からの「あなたは理科の教師として先生になったのだから、授業で勝負しなさい」「40歳を過ぎたら教師としての方向性を決めなアカン」という言葉を実行するという意味もありました。

しかし、事前に受けた冬季集中「実践記録を読み解く」では、何が書いてあるのかちんぷんかんぷんの状態でした。『探究』『コミュニティ』『協働』『マネジメント』など単語は聞いて知っていましたが、実践記録の中に生きているその姿を理解することはできませんでした。情けなく、今後に対して不安になりました。

でもそんな気持ちを和らげてくれたのが、同期入学の19名の先生方でした。集中講座の合間に学食でカレーを食べながら、「分からない。」と愚痴や弱音をこぼす時間が、大きな支えになっていました。

2か月がたち、何回かの集中講座を受け、かなりの数の実践記録を読んだり、自分の振り返りを書き留めたりする中で、大学院で学んでいることが何となく見えてきたように思います。もっと多くの実践記録を読みたいと意欲も高まっています。

学校での授業も少し変わってきました。例えば、1年生での主根・側根とひげ根の学習の中で、「先生、もじゃもじゃ根っこと真ん中のぶつとい根っこの、茎と葉っぱの付き方の特徴を発

見したよ。」
というように、これまでの聞き流していた生徒のつぶや

きに耳を傾け、とらえることができるようになりました。そして次の課題に進めています。

さらに、先週、金津中学校に「授業改革ワークショップ」というものを立ち上げることができました。柳澤昌一先生、石井恭子先生にも参加いただいています。きっかけは、授業中の悩みをある先生に相談したことからでした。「若い先生も同じ悩みを持っているんやろうね。」という言葉に、『一緒に勉強しようか』と思いついたわけです。月1回のペースで、悩みを共有しお互いに向上できる場にしていきたいと考えています。

このように、教職大学院に入学して、私の中でいろいろな変化が生まれつつあることを実感しています。県内の仲間が増えた(ネットワークの広がり)ことや、自分の授業を振り返ることができた(省察する機会)こと、そして同じ生徒を目の前にして話ができる組織(実践的コミュニティ)ができたことです。これからも人と機会を大切に、食欲に学び続けたいと思います。このようなチャンスを与えてくださった関係各位に心から感謝申し上げます。



6月のラウンドテーブル・速報

主催：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）

6/28 sat 13:30-17:30

教職大学院

入試説明会を行います。

12:30~13:00

福井大学 教育地域科学部

1号館 大講義室

協働の教育実践と教師の力量形成

Session I 13:30-15:00 公開シンポジウム「新しい教師教育を語る」

世界的に進む教師教育改革。その方向性を見定めながら、実際に進みつつある教職大学院における構想と実践を共有します。門脇厚司（筑波大学名誉教授：日本教師教育学会会長）・寺岡英男（福井大学）ほか

Session II 15:20-17:30 ワークショップ「学校と大学が協働する教育改革」

小グループに分かれ、学校と大学が協働して進めている教育改革の取組について、各グループ2つの大学から具体的な事例をもとに語ってもらい、学校・大学それぞれの視点から議論します。

6/29 sun 8:0-14:30

実践研究ラウンドテーブル

はじめに 8:50-9:00

Session III 9:00-11:20 展開を語る／プロセスを聴き取る part1

小グループに分かれ、実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語るとともに、語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきます。教職大学院の院生、拠点校や連携校の校長・教頭、医療・福祉・教育の多様な分野の実践者、学部で学ぶ学生など、様々な立場の参加者を予定しています。9:00-9:40（自己紹介） 9:40-11:20（報告1）

Session IV 12:00-12:15 全体会「実践を語ること・書き表すことの意味」

Session V 12:20-14:30 展開を語る／プロセスを聴き取る part2

午前中と同じグループで、もう一つ報告を語り／聴き、1日を通してそれぞれが考えたこと・感じたことを共有します。 12:20-14:00（報告2） 14:00-14:30（結び）

●申し込み●

①氏名（ふりがな）、②所属・役職、③メールアドレス、④電話番号、⑤参加日（両日・6/28のみ・6/29のみ）、を明記の上、6/14(土)までに dpdtfukui@yahoo.co.jp へお送りください。なお、6/29の実践報告者を募集しています。報告いただける方は申し込みの際にお知らせください。

教育実践と教育改革を考えるために（４）——OECDの能力観



「PISA」が大流行である。PISAはOECD（経済協力開発機構）が2000年から3年ごとに行っている国際リテラシー調査で、この結果公

表に日本中が一喜一憂し、教育政策がどんどん動いていく。これに困惑する教育現場も多いことだろう。

ところで、そもそもPISAではどのような力が測られているのだろうか。それはどのような考え方に基づくものなのだろうか。この点については既に様々な報道がなされているが、やはりPISAを実施しているOECD自身がどのように説明しているかを確認しておく必要がある。このとき重宝するのが本書である。

昨年度から始まった全国学力・学習状況調査では「知識（A問題）と「活用」（B問題）の2つに分けて調査が行われ、そこではPISAを意識した問題作成が行われていると言われている。しかし、PISAのリテラシーや評価の枠組みに「知識か活用か」と両者を対立的にとらえる発想はない。常に、どのような状況で、どのような知識を活用し、どのような能力を発揮するか（2006年調査ではさらに、これにどのような態度が関わっているか）、その質的な違いを見ようとしていることが読み取れる。

また、最近「確かな学力」の保障に向けて、基礎的な知識の定着を図る習得型の授業と、習得した知識の活用を図る探究型の授業という2つのサイクルが提案されている。しかしながら、例えば本書の科学的リテラシーの枠組みでは、同じ「科学的知識（scientific knowledge）」と言っても、そこに「科学の知識（knowledge of science）」と「科学についての知識（knowledge about science）」の2つがあることが指摘されている。「科学の知識」（of の知識）は自然界についての知識とされ、日本人が一般に「知識」という日本語でイメージし、教科内容として設定しているものがこれに当たるだろう。これに対し「科学につ

PISA 2006年調査 評価の枠組み

——OECD 生徒の学習到達度調査

OECD 編、国立教育政策研究所監訳、ぎょうせい、2007年

いての知識（about の知識）は、「科学の知識」がどのように生み出されるのかということに関わるもので、そこには、科学者がどのようにしてデータを得ているかということに関わる「科学的探究（scientific enquiry）」と、科学者がどのようにデータを用いるかということに関わる「科学的説明（scientific explanations）」の2つがあるとされている。「科学についての知識」はおそらく、繰り返し学習による徹底反復で身に付くようなものではない。実際に探究しコミュニケーションする中でしか培われないものであろう。それは、その実践と省察を成り立たせているコミュニティの構造に大きく依存する。探究学習でこそ習得される知識の質を、コミュニティの構造との関係で問うことの重要性を示唆するものである。

さらに、PISAで測定しようとしている能力の観点に目を向けると、日本の文部行政で用いられている評価の観点とは異なる視点に気付かされる。再び科学的リテラシーの枠組みを例に取ると、PISAでは「科学的な問題を同定する」「現象を科学的に説明する」「科学的な証拠を用いる」という3つの能力に焦点を当てた調査が行われている。これらは、例えば日本の理科で用いられている「自然事象への関心・意欲・態度」「科学的な思考」「観察・実験の技能・表現」「自然事象についての知識・理解」といった評価の観点とは明らかに異なるものである。

ただし、ここでPISAにあって日本の教育実践に足りないものを列挙し、それを補充するような教育実践をやれば良いかと言えば、そうでもない。それぞれ出てきた背景も違えば、目的としていることも異なるからである。さりとして、PISAが提起する新しい視点自体は重要である。そこで、「PISA型○○力」に向けて教育課程を組み直してしまう前に、まずはPISAが提起するリテラシーの枠組みを手掛かりに、今ある実践を見つめ直してみたい。これまで「何となく良い」と思っていたものが「なぜ良いのか」、これまでとは違った言葉で語り直せるのではないだろうか。本書は、この作業の一助となるだろう。

キー・コンピテンシー——国際標準の学力をめざして

D. S. ライチェン&L. H. サルガニク編，立田慶裕監訳，明石書店，2006年

また「ところで」であるが、PISA は能力調査として万能なのであろうか。答えはもちろん否である。そこで重要なのは「PISA は何を評価していないか」を評価することである。この作業を怠ると、PISA の結果の解釈を誤ってしまう。

本書は、OECD によるプロジェクト「コンピテンシーの定義と選択：その理論的・概念的基礎 (Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations)」（通称 DeSeCo）の最終報告書である。DeSeCo は、社会や個人にとって価値ある結果をもたらす、いろいろな状況の重要な課題への適応を助け、特定の専門家だけでなくすべての個人にとって重要な能力を「キー・コンピテンシー」とし、専門分野も出身国も異なる専門家集団で議論しながら、その内容を整理・定義している。

DeSeCo プロジェクトで抽出されたキー・コンピテンシーは、①「相互作用的に道具を用いる」、②「異質な集団で交流する」、③「自律的に活動する」という3つのカテゴリーに整理され、その中核に「省察性 (reflectivity)」（本訳書では「反省性」ないしは「思慮深さ」）が位置付けられている。ここで、PISA 調査の対象となっている科学・数学・読解の各リテラシーはどれもカテゴリー①に入るとされている。換言すると、②や③に分類されるコンピテンシーは PISA では評価していないということである。ここから、PISA で評価の対象となっているリテラシーを育めばそれでいいというものでもないことが分かる。

このような状況の中、DeSeCo のキー・コンピテンシーを「生きる力」や「人間力」と読み替えて日本の教育現場に広めようとする動きがある。ただ、DeSeCo のコンピテンス概念に目を向けると（第2章）、能力を、状況や文脈に依存する機能面から関係論的にとらえるアプローチが採られており、「〇〇力」という日本語でイメージされる、文脈独立的な実体として能力をとらえるアプローチとは一線を画している。それらを同一視すれば途端に曲解が起こってしまう。DeSeCo で「ホリスティックモデル」という名で提案されている独特の能力観を確認しておく必要がある。

さらに「ところで」であるが、DeSeCo のキー・コンピテンシーはそもそも何のために必要なのだろうか。この問いに対する本書の答えは明快である。それは「人生の成功 (a successful

life)」と「うまく機能する社会 (well-functioning society)」のためであり、そのことは本書の原文（英語）タイトルにはつきり示されている（ちなみに、邦訳版の副題となっている「国際標準の学

力をめざして」に当たる言葉は原文タイトルにはない）。そして、「人生の成功」と「うまく機能する社会」とはそれぞれどういうことで、両者をどう両立させるかということについても説明がなされている（第4章）。その能力を個人に育むことで一体どのような社会を築きたいのか。この点についての明確なビジョンがないと、教育目標の設定とその評価も雲をつかむような話となってしまうのである。

DeSeCo は国際的な議論の上に成り立っているとは言え、その中心はヨーロッパにあり、EU の価値観に強く影響されている。したがって、DeSeCo で提案されているものを無批判に受け入れることにも問題があろう。そこで本書から学びたいのは、OECD が出した答えそのものではなく、その答えの導き出し方である。価値が多様化する中で、それらをどう調整し、一つのビジョンとして共有していくのか。そのために、どのような理論的・概念的基盤が必要となるのか。この点で DeSeCo の議論プロセスから学べることは多い。

最後に、キー・コンピテンシーの中核である「省察性」について、本書では次のように説明されている（208頁を改訳）。

それ [=省察性] は、個人がどのように考えるかということだけでなく、より一般的に彼らが経験をどのように構成するかということに関わるもので、そこには彼らの思想や感情や社会的関係が含まれる。このとき個人には、社会的な圧力から距離を置き、異なる展望を持ち、自立的な判断をし、自分の行為に責任をとれる、一定水準の社会成熟度に達することが求められる。

「習得型か探究型か」「知識か活用か」「基礎か応用か」といった二項対立に陥ることなく、常に思慮深く自分自身を客観視できる「省察性」を高め続けること。教職大学院では特に大切にしたい考え方である。（遠藤貴広）



報道ファイル

福井新聞社提供

2008年5月24日(土)
福井新聞に、福井大学附属中学校の学年プロジェクトの様子が紹介されました。

第3種郵便物認可

福井大附属中2年が DASH村 食や環境 理解深め

「こちに苗ちようだ いーうわあ、オタマジ ヤクシー」足が泥に取られてうまく前に進めない。五月中旬の越前町大谷寺。二年生が慣れない田植えに四苦八苦、泥んこになりながらも苗の手植えは楽しそう。学校を飛び出した田植えは「附中版DASH村活動の一つ、約二十坪の水田に二時間かけ古代米の苗を植えたプロジェクト。副実行委員長の砂山悠季さんは「自分たちが食べたいものが、どのよう

福井大附属中の学年プロジェクト。社会のなかから自分の生き方を考えることを目的として同校が1998年度から始めた取り組み。2002年度からは総合的

な学習の時間に行われていた。入学から卒業までの3年間継続し探究活動を行うことで、主体的、創造的に問題を解決する力を養う。実行委員会が中心となりテーマから、

「畑・発電」など七グループに分かれ進むが、実行委員のメンバーを中心に、学年全員による討論も欠かさない。教師の直接指導は少なく、生徒には未体験のこ

とだらけで、思い通りの作られているかが学べないことも多い。実行委員長の勝尾彬君は「畑の予定地に芝が深く根付いていて、土壌整備に時間がかかったり、さあ野菜を植えようと思ったら、定期的に植える野菜がなかったり」とまよさに手探り。しかし「自分たちに任されている分、失敗も多いけれど、自由に考えることの面白さを知った」と笑う。

中庭にあるピオトープには一年生だった昨年十校の近くでシジュウカラ

な学習の時間に行われていた。入学から卒業までの3年間継続し探究活動を行うことで、主体的、創造的に問題を解決する力を養う。実行委員会が中心となりテーマから、

などの野鳥が見られるようになった。目下、夏の放送などを検討中だ。学年主任の高橋和代教諭は「生徒たちが三年生になつて活動全体を振り返る過程で、その意義に気付いていくはず。最終的には活動を学級演劇や冊子として、まとめていきたい」と話している。

活動二年目のDASH村は、報道にも力を入れている。文化祭に向け「村づくり」を、どのように他の学年や校外に発信したい」と話している。

附中版DASH村の校外学習で、田植え体験をする2年生。越前町大谷寺

校内に畑、巣箱、ピオトープ... 体験学習生かす

15 文化・生活 2008年(平成20年)5月24日(土曜日) 永富

Schedule

- 6/14 sat 福井大学附属幼稚園公開保育 (任意参加)
- 6/28 sat - 29 sun 実践研究福井ラウンドテーブル
- 7/12 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)
- 7/22 tue -24 thu 夏の集中講座 1a (9:30-17:00)
- 7/29 tue -31 thu 夏の集中講座 1b (9:30-17:00)
- 8/1 fri - 2 sat 教育のアクションリサーチ研究会 (熱海：東京大学主催 (任意参加))

- 8/ 4 mon - 6 wed 夏の集中講座 2a (9:30-17:00)
 - 8/ 6 wed - 8 fri 夏の集中講座 2b (9:30-17:00)
 - 8/18 mon - 20wed 夏の集中講座 3a (9:30-17:00)
 - 8/20 wed - 22 fri 夏の集中講座 3b (9:30-17:00)
- 集中講座は1・2・3それぞれ ab どちらか選択 (abの組合せ自由)

[編集後記] 教職大学院の出発から2か月。拠点校、連携校それぞれの取組の様子が報告され始め、大きなうねりが確実に起きているを感じる。NewsLetterの発行を通して、学校や院生同士の協働を支えていきたい。(K)

教職大学院 Newsletter No.4
2008.06.06
編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
Team4: 長谷川義治・淵本幸嗣・石井恭子・遠藤貴広
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp